令和７年度　墨田区立立花吾嬬の森小学校　学校経営計画・経営報告書（自己評価・学校関係者評価）令和８年３月

作成者　校長　向井一郎

学校教育目標	身体も心も健康で、思いやりの心をもち、よく考え学ぶ子供
目指す学校像	子供たちの笑顔のために、教職員が互いに磨き合い、チームとして進んでいく学
目指す児童像	夢の実現のために目を輝かせて、進んで取り組むことの出来る児童
目指す教師像	児童の夢の実現のために学び合い、努力を続ける教師

○令和７年度　学校経営計画における重点内容
昨年度の児童、家庭、地域からの評価は概ね高い数値になっている。毎日楽しく通っていることへの意識も高い。その一方で、不登校状態にある児童の校内に複数名いる。その背景、理由は様々なものがあるが、地域とも連携を強化し、不登校についての対策を考えていかなくてはいけない。学校似通うことが理想であるが、児童にとっての最適の居場所を、幼保小中、そして地域の方々との連携の中で議論していくことが大事だと考えている。今回、一年間の学校経営をふり返り、学校の目標としている「明日が待ち遠しい学校」「笑顔で登校する」ことは現実のものにできていると自負しているが、今年度は授業の中身、指導方法、個別指導も含めて児童それぞれが、学年で学ぶべき内容が確実に履修できるように努力をしていく。授業改善、教材教具の工夫、さらに復習プリントなどの有効活用について、一層の努力

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		評価	成果指標		評価	分析	改善方策	学校関係者評価		
											自己評価	改善方策	意見等
各教科指導等	○確かな学力を育てるための、分かりやすい授業を実施する。 ①児童にとって分かる授業を実施する。 ②学習内容に応じてタブレット端末を活用する。 ③補習等で児童のつまずきに迅速に対応する。	・基礎・基本を身につけ、さらに思考力を高める授業づくりを進め、教員の研修をさらに充実させる。 ・タブレット端末を児童が考えをまとめ、深めるための発表用ツールとしても日常的に活用できるようにする。 ・補習の年間の実施回数を増やし内容もさらに充実させる。	4 3 2 1	年度末反省「教員の授業の工夫」等で肯定的評価100% 年度末反省「教員の授業の工夫」等で肯定的評価80%以下 年度末反省「教員の授業の工夫」等で肯定的評価60%以上 年度末反省「教員の授業の工夫」等で肯定的評価60%未満	3	4 3 2 1	分かりやすい授業の実践の成功　80%以上 分かりやすい授業の実践の成功　70%以上 分かりやすい授業の実践の成功　60%以上 分かりやすい授業の実践の成功　60%未満	4	算数では少人数指導を低学年から進め、すべての児童がわかるような授業づくりを進めている。授業の工夫についての評価もわかりやすい授業の実施についても肯定的な評価は８７％となっている。 タブレット端末の活用と、教科書とノートを使った授業も全学年で行えている。タブレット端末を活用した授業を89%が評価している。	国語については校内研で、算数については低学年から行っている少人数指導の実践で、分かりやすい授業を日々検討実践するようにしているのでそれを継続する。さらに、生活科、社会科、理科などの授業については、児童が主体的に学びを進めていきたくなる「問い」をどう抱かせるかという点で、校内で研修を行い、日々の実践に生かすようにする。その中で、タブレット端末を駆使し、自分の考えをノートに記すことを確実に行うようにする。	A	A	・「問いをもたせる」授業が良いという評価。 ・タブレット活用が定着しており、紙とデジタルのバランスを重視してほしい。 ・学力向上の難しさや正解のない学びにどう向き合わせるかが課題。 ・発問に時間を割くことが「考える力」につながる。 ・字を書く量を増やすことも大切。
	○特別な支援を必要とする児童に対しての組織的な支援 ①特別支援校内委員会を毎月一回行い、その中で児童の情報を共有し、適切な対応を考える。 ②不登校児童の様子をICT機器類を生かし把握するほか、担任からの日常的な声かけで家庭との連携の下で支えるようにする。 ③日常的に補習授業も行い、全ての児童が分かった上で日々の学習を進めていくことができるようにする。	・校内委員会を定期的に開き、適切な対応を進め、外部機関との連携も図る。 ・心の不安定な児童への個別に対応方法を検討し、児童の居場所づくりを進める。 ・ふり返りシートを活用し、学習した内容がその都度定着しているのかを確認し、不十分な場合は、休憩時間等にもミニ補修などを行い、児童のつまずきに対応する。	4 3 2 1	不登校対策実施（全学年で完全実施） 不登校対策実施（時期によって実施） 不登校対策実施（不定期実施） 不登校対策実施（全く実施できず）	4	4 3 2 1	不登校児童　0人　いじめ対応すべて解決 不登校児童　１～5人 不登校児童　6～9人 不登校児童　10人以上	3	校内委員会及び不登校対策委員会を定期的に開き、各児童への対応方法を個別に考えている。SCやSSWなど、専門的な見地から助言も受け、ひとり一人に合わせた対応を考えるようにしている。定期的な自宅訪問や保護者面談を密にとることで少しでも早く安心して過ごすことのできる方法を個別に用意している。相談体制についての保護者の評価は88%である。	体制は整ってきているので、児童それぞれのケースに合わせて対応方法を検討していく。その方法は現在の形を維持する。さらに、外部の専門家、教育委員会内の各担当者とも連携を密に取るようにする。校内に、一定期間安心していることのできる空間も準備し、教室復帰の前のワンステップとなる場所も設けるようにする。	B	B	・子どもが安心できる「居場所づくり」が重要。 ・学童・児童館との連携を積極的に活用してほしい。 ・特別支援教育に力が入っていると感じるとの意見。 ・家庭との連携を大切にし、教室復帰を諦めない姿勢を期待。
	○児童の将来の自立に向けた進路指導・キャリア教育・相談活動に積極的に取り組む。 ①教員だけではなく、外部の人材も生かしながら、児童の未来に「ゆめ」をもたせる教育を進める。 ②児童からの相談、悩みに迅速に対応し、必要に応じて関係機関ともつなぐ。 ③異学年児童のかかわりあいを大事にし、児童の自立的な活動を保証する。	・外部からの人材を生かしつつ、児童が地域に出て活動する場面を多く設ける。引き続き地域を学習の場とする。 ・本校の特別支援学級での教育の進め方も参考とし、それぞれの児童への指導に生かす。 ・縦割り交流を定期的に行い、その中で高学年児童の意欲、まとめる力を高める。	4 3 2 1	教員以外の人材活用（全学年で実施） 教員以外の人材活用（半分以上の学年で実施） 教員以外の人材活用（あまり実施できず） 教員以外の人材活用（全く実施せず）	4	4 3 2 1	保護者アンケート　外部人材の活用肯定回答　90%以上 保護者アンケート　外部人材の活用肯定回答　80%以上 保護者アンケート　外部人材の活用肯定回答　70%以上 保護者アンケート　外部人材の活用肯定回答　60%未満	3	保護者の評価は86%である。実際はそれ以上に地域をフィールドにした学習を行う音がでた。フットサルやボール運動の外部団体を招いたり、それぞれの教科の中で専門性を持った方や、特別な経験、体験をしている方から直接話を伺う機会も増やすことができた。本校でも重視している「平和教育」にも力を貸していただいた。	これまで同様に様々な人の力を借りながら、児童の健全育成が進められるように努力をする。低学年においては、以前に行っていた祖父母も含めた年長者との交流場面なども復活するようにする。また、引き続き、戦争体験者との交流を基盤として、その継承者になるという意識をもってかかわることを進める。なお、これまで行ってきていない地域に多く住む外国人の方々の力も、様々な教育場面で借りることも考えていきたい。	B	B	・外国籍児童への文化理解を地域と連携して行うとよい。 ・地域愛や郷土の歴史教育の充実。 ・戦争体験の語り手確保は難しいが工夫して実施を。 ・地元の人材（町会長・卒業生）活用の提案。 ・学校での体験活動の推進を要望。
生活指導等	○学校は児童の抱える問題の予防や、解決に組織的に取り組む。 ①情報を全教職員で共有し組織的に対応する。 ②必要に応じて、外部機関との連携を取り、問題に迅速に対応する。	・一つ一つの問題を校内、さらに外部の関係者と共有して解決に向けて取り組む。 ・情報については毎週の生活指導連絡会で校内で共有し、皆が同じ情報をもち同じ目的をもって行動できるようにする。	4 3 2 1	生活指導上の問題の解決（完全解決） 生活指導上の問題の解決（ほぼ解決） 生活指導上の問題の解決（半分が解決） 生活指導上の問題の解決（ほとんど解決せず）	2	4 3 2 1	児童からの相談（0～5件） 児童からの相談（６～10件） 児童からの相談（11～19件） 児童からの相談（20件以上）	1	各クラスにおいて、担任はできる限り子供たちの声に耳を傾けるようにしている。また、COCOOやシャボテンログなどの媒体を使い保護者、児童からの声を日々聞き取れるようにしている。相談件数は多いが、解決できる問題は学級学年の中で解決している。それを超えた内容は管理職を中心とした組織の中で対応を進めている。	相談の窓口は現在のものを生かしていくが、その相手については、担任以外の者もかかわることができるようにしていくこと。また解決方法も、校内で相談内容を共有し、複数の専門家がアドバイスをすることができるようにする。内容によっては、関係諸機関にもつなげていくようにし、できるだけ早く、的確なアドバイスを相談者に返すことができるようにする。	C	B	・重要で難しい課題だが積極的な取り組みを評価。 ・支援が必要な家庭が増えており学童等との連携も重要。 ・専門家を交えた支援を期待。 ・「生活指導」等の用語統一の提案。 ・迅速で的確な対応を期
	○児童が基本的な生活習慣を身につけ、望ましい人間関係を作るために、心の教育を推進する。 ①自尊感情を高めるための活動を意図的に設けていく。 ②児童の困り感、問題に教員が早く気付き、適切な対応をする。	・朝会などを使い、校長自ら児童に対しての生活指導的な講話を定期的に行う。 ・児童の人間関係を豊かなものにする努力を続ける。具体的には、心の叫びに耳を傾ける教職員であるようにする。 ・そのための研修も続ける。	4 3 2 1	児童が意欲をもって登校（全員） 児童が意欲をもって登校（ほぼ全員） 児童が意欲をもって登校（半分） 児童が意欲をもって登校（半数以下）	3	4 3 2 1	児童アンケートの結果「明るくて楽しい学校生活」（90%以上） 児童アンケートの結果「明るくて楽しい学校生活」（80%以上） 児童アンケートの結果「明るくて楽しい学校生活」（70%以上） 児童アンケートの結果「明るくて楽しい学校生活」（60%以上）	4	児童のアンケートでは95%が学校が楽しいと答えている。ただ実数で比べると7月の結果では否定的な児童が10人、それが2月には16人と増えている。16人という実数にすると学習面、生活面、家庭生活面など、様々な問題を解決していかねばいけない児童がいることを深刻に受け止めなくてはいけない。相談、支援体制を整えながら、家庭と連携を取る必要がある。	校内に16人以上の悩みを抱え、問題を解決できずに困っている児童がいるということを意識し続ける。学級で平均すれば各クラスに一人以上は必ず問題を抱えている児童がいるのだという意識をもつようにする。そういう中で、再度自分がかかわる児童の表情、様々な場面での言動に目を向けるようにし、問題の早期発見に力を入れる。	B	B	・「誰一人取り残さない」姿勢を評価。 ・子どもが学校以外で話す内容の共有が重要。 ・早い気づきが大切。 ・先生一人ひとりの努力や会話が重要。 ・学年・担任変更で改善する可能性にも言及。 ・メール等を活用した早期対応の提案。
	○児童の安全確保のための取組を確実に行う。 ①校舎内外の安全の確認と確実な対処。 ②防災教育の充実により、危機に際し自分で判断できる児童を育てる。	・毎月の安全確認を必ず行い、問題については早期対応する。 ・毎月の避難訓練や、交通案教室棟などは確実に行い、内容も充実させる。	4 3 2 1	訓練の実施・安全の取組（毎月） 訓練の実施・安全の取組（数ヶ月） 訓練の実施・安全の取組（年の半分） 訓練の実施・安全の取組（ほとんど実施できず）	4	4 3 2 1	校内での事故等が　0～5回 校内での事故等が　6～10回 校内での事故等が　11～20回 校内での事故等が　21回以上	3	児童が治療のために長期に渡って通院しなくてはいけないような事故は発生していないが、体育の時間、休み時間などに、打撲、裂傷などの事故は起きている。諸活動を計画する場合、最悪の場面を想定して進めることが重要である。なお、救急車を要請するような事案は発生していない。	月に一回の施設内外の点検は継続し、日常の巡回の中でも、各教員が、児童の目線で校内での活動を見るようにする。特に、校庭や体育館での活動については、想定しうる危険な場面を全職員で共有し、万一に備える。教室、廊下も含めて、危険は必ずあるという前提で児童の活動を計画するようにする。	B	B	・丁寧な安全対応に安心していると声。 ・危機管理は日頃の備えが重要。 ・児童会の機能への関心。 ・日常的な安全意識づくりを重視。
学校の管理運営	○経営方針に基づき、組織的な教育活動・学校運営を行う。 ①経営方針に基づいた自己申告書を作成し、定期的に振り返り、問題点を修正しつつ進む。 ②分掌をより動きやすいものとし、運営上問題が生じた場合は修正する。	・墨田区の施策についての理解も深め、より児童にとって意義のある教育活動になるように努力する。 ・分掌については、各自の関わり方が均衡するように工夫する。学年の問題も共有し、一部の教員だけが苦労するような形にはならないようにしていく。	4 3 2 1	全員が均等に仕事をしている実感をもつ（100%） 全員が均等に仕事をしている実感をもつ（80%以上） 全員が均等に仕事をしている実感をもつ（60%以上） 全員が均等に仕事をしている実感をもつ（60%未満）	3	4 3 2 1	ストレスチェック値でストレスが多い（0～10%） ストレスチェック値でストレスが多い（11～20%） ストレスチェック値でストレスが多い（21～40%） ストレスチェック値でストレスが多い（41%以上）	3	校務分掌を見直し、ひとり一役を担う体制を作った。ただし、引継ぎの必要性もあり複数体制は残したのだが、複数人で仕事を進める場合、経験年数の高いものに頼ってしまう傾向が出てしまった。また、分掌の数が多いため、一人で複数の担当をすることが生じ、仕事量の多さにストレスを抱いてしまう教員が多くいることも事実である。	日中、放課後も含めて、教員の相談が管理職にしやすい環境をつくる。また、チームスなどの媒体を使い、気軽に相談をすることができるようにする。また、その相談に対してはできるだけ早いタイミングで管理職が応答できるようにから心がける。解決に至るまでは、様々な専門家にも協力をしてもらう。（区内外を通して）	B	B	・学童等と連携した見守り体制の強化を希望。 ・服務規律の教育も必要との意見。 ・子どもの思いをつかむ姿勢が大切。 ・中間管理職の活用・権限委譲の提案。 ・会議以外の対話の時間確保が大切。
	○児童の実態に合わせた目標の設定、評価を確実に行う。 ①学校運営協議会を組織し、そこでの声も生かしつつ、学校運営を進める。 ②学校の様子を、家庭、地域にわかるように発信し、意見も集める。	・年三回の会議の開催を確実に行う。また、運営会議の皆様からの声は、日常においても聞くことができるようにする。	4 3 2 1	年三回の実施（完了） 年三回の実施（完了したが課題残る） 年三回の実施（課題は山積） 年三回の実施（できず）	4	4 3 2 1	アンケート　学校の広報活動　90%以上 アンケート　学校の広報活動　80～89% アンケート　学校の広報活動　70～79% アンケート　学校の広報活動　69%以下	4	学校運営連絡協議会を定期的に開催し、そこで校内外の様子についての情報共有を図ることができた。また、保護者に対しては学校だより、ホームページ、COCOO発信などで情報を直にお届けするようにした。	年間3回の協議会以外の場面でも、地域の方々との対話の場面を増やし、多くの学校をよくしていこうというアイデアをいただけるようにする。それは各行事の際でもあり、ふれあい給食や、交流活動など、外からのお客様をお招きする場面でも行っていく。	A	A	・協議会で多くを学んでいるとの声。 ・学校・地域・家庭を把握する体制が重要。 ・基本的マナー（会う札）徹底の指摘。 ・HPで日常の様子を発信することを提案。
	○地域の子供を育てるために、幼保小中の連携も大事にして進める。 ①時代の変化に対応しつつ、地域の児童を大きな支えの中で育てる。	・中学、幼稚園とのこれまでのような連携の他に、保育園との連携も行う。無理のないかたちで活動を継続をしていく。	4 3 2 1	実施（完了） 実施（完了したが課題残る） 実施（課題は山積） 実施（できず）	4	4 3 2 1	関係者からの不満　　なし 関係者からの不満　　1～5件 関係者からの不満　　6～9件 関係者からの不満　　10件以上	4	同じ地域内で生活する子供たちの姿を連携協議会という公的な場、日々のの園や児童館、中学校、近隣校間でのやり取りの中で共有し、年齢、学区を超えて課題となっていることには迅速に対応することができている。	幼保小中連携事業は、引き続きこの地域内で継続をする。そして、その中で生み出される効果的な教育活動は、他校でも行えるようにし、地域全体で同じまなざして、児童の健全育成を進めていくことができるようにする。	A	A	・今後も継続を希望する声が多数。 ・コミュニケーションのスピード化が必要。 ・近隣校との交流・縦割り活動への関心。 ・地域の強みを生かした連携を期待。
家庭・地域連携	○教育方針や日常の学校の様子を、保護者や地域にわかりやすく伝える。 ①学校だよりの作成、ホームページの発信などに尽力し、意見を取り入れつつより良いものにする。	・毎月初めの「たより」の発信と、地域への配布。ホームページは毎日の更新を進め、内容を工夫し、読み手が読みたくなるような紙面づくりを行うようする。	4 3 2 1	実施（毎月完了） 実施（完了したが課題残る） 実施（課題は山積） 実施（できず）	4	4 3 2 1	アンケート回答での高評価　90%以上 アンケート回答での高評価　80～89% アンケート回答での高評価　70～79% アンケート回答での高評価　69%以下	4	93%の肯定的な評価をいただいているが、その内容の充実については今後も努力を続けなくてはいけない。特に、教育、学力向上に関しての最新情報、校内での様子などを話題とすることが必要である。日常の様子を伝えているものの、学習の状況、学年ごとの詳しい実態などが十分に伝わっていないところがあった。	学校だより、ホームページには、学校長の考え以外のことも掲載できるように工夫していく。子供たちの努力している姿を複数の教員がどのように見ているのかということが家庭に伝わるように努力をする。特にホームページには、各学年の活動の様子を日常的に掲載できるように工夫をする。	A	A	・HPを楽しく見ているという評価。 ・先生個人の発信も歓迎。 ・全教員紹介の継続提案。 ・学年ごとの分担など特色づくりの提案。
	○地域や保護者の力を生かした教育活動を進める。 ①地域の中の人材を活用できるようにし、そのための情報を集める。	・人材リストをもとにして、各学年での地域の力の活用を進める。商店街、町会を中心とした地域の方々との学習場面での交流も進める。 ・地域にある老人介護施設との交流も考える。	4 3 2 1	有効に実施（毎月） 有効に実施（時々） 有効に実施（あまり出来ない） 有効に実施（全く出来ない）	4	4 3 2 1	アンケート回答　地域を生かしている　90%以上 アンケート回答　地域を生かしている　80～89% アンケート回答　地域を生かしている　70～79% アンケート回答　地域を生かしている　69%以下	3	86%の高評価を得ているが、各学年で日々の授業にかかわっていただいているゲストティーチャーとの交渉は、担任の意欲と授業への思いの度合いにかかっているところがある。さらにリストを整備したい。また、地域の公的施設・機関とのかかわりについては努力したい。	それまで効果のあった活動をただ継続するのではなく、さらに改善できる点を考えながら計画を磨き直すようにする。	B	B	・地域の力を活用してほしいという要望。 ・地域行事は防災面でも意義がある。 ・課題に対し反省会も必要との意見。 ・地域人材の発掘を提案。 ・行事のアップデートを期待。
	○児童や保護者の心情、意見や要望を確実に把握し、教育活動を進める。 ①定期的なアンケート調査で情報を集める。 ②各種の機器類、媒体を利用して保護者の声を聞く。 ③児童ともロイロノートなどを活用し、その思いを受け止める。	・「明るく楽しく生活をした」項目の結果を上げる。 ・ホームページとアンケートの活用で、それぞれの思いを受け止めるようにしていく。	4 3 2 1	明るく登校している（ほぼ全員） 明るく登校している（5人程度が休みがち） 明るく登校している（10人程度が休みがち） 明るく登校している（10に以上がいつも休んでいる）	2	4 3 2 1	アンケート児童　明るく楽しく生活　90%以上 アンケート児童　明るく楽しく生活　80%以上 アンケート児童　明るく楽しく生活　70%以上 アンケート児童　明るく楽しく生活　60%以上	4	。児童のアンケート「毎日の学習は楽しいですか？」の項目は91%の児童が肯定的であるととらえたが、実数は全校で28名の児童が「学習が楽しくない」と答えているのである。一学級の人数といえる数の者がつらい思いをしていることに目を向ける必要がある。その原因を究明し、補習教材などを工夫し、全児童が学習が楽しいと思えるようにする必要がある。	学習の楽しさ、授業の楽しさを工夫することは先の項目でも示していることであるが、児童に対して、楽しいということは知らなかったことを初めて知る喜び、不思議だと思っていたなぞが溶けた喜び、自分が学んでさらに知りたいと思ったことを理解することができた喜びであり、友達とくつろいだり、遊んだりするときの「楽しさ」とは違うものであることをしっかりと伝えていくようにする。	B	B	・学習に抵抗感ある子にも「楽しさ」を共有したい。 ・問題が解ける経験が自己肯定感に。 ・褒めることで信頼関係が深まる。 ・親子での学びや大人の学びにも着目を。 ・探究活動で「卒論的発表」をする構想の提案。

○令和７年度　学校経営報告のまとめ 学校が目指している「笑顔で元気に登校する」という点は、おおむね目標は達成されているように見える。割合で表すと9割以上の児童が明るく元気に登校できていることになる。しかし、実数に置き換えると全校で16人（保護者アンケートの結果：30人から28人）の児童が「楽しくない」と感じている現実を直視しなくてはいけない。児童自身がより多く叫び声をあげているのである。学習については28人の児童が楽しくないと答えている。
これだけの児童が学習、友人関係、家庭生活、その他、何らかの理由で朝目覚めても元気に学校に迎えていない。その原因を個別に探り、全員が笑顔で登校できる学校を作ることが必要である。